

# 60周年記念号の発行に当たって

本年4月で日本地球化学会は創立60周年、いわば還暦を迎えた。このような年に60周年記念号を企画した「地球化学」編集委員会は、その中にどのような記事を掲載したかったのか、その意図を簡単に記しておく。

今から60年前といえば1953年、日本はまだ戦争の記憶も鮮明で、高度成長期前の物質的にはまだ不足の多い時代であっただろう。その点では、明らかに現代の方が恵まれている。一方で、1950～60年代は希望には満ち満ちた時代であり、絶対値ではなく微分係数をみれば明らかに今よりもプラスな、元気があった時代なのではないかと思う。このような時代背景の中で、野津（2013）に語られているように1920年代に産声を上げた地球化学は、既に多くの研究者の心を捉えたばかりでなく、日本の地球化学者は既に世界に誇れる研究成果を多数発信し始めていた。決して裕福ではなかった時代に、先達たちはどのようにして世界的な研究成果を生み出してきたのか。本特集号のひとつの狙いは、この時代をよく知る方々から、現在の研究者へのメッセージを頂き、現代日本の地球化学者を鼓舞することで、世界的な成果が発信し続けられて欲しい、ということにあった。その点で、長澤（2013）に描かれた当時の高揚感は、本号で表現して頂きたかったことそのものである。そしてそれをつなぐように、和田（2013）では、現在大輪の花を咲かせている食物連鎖解析などの軽元素同位体研究の1960年代以降の変遷が語られている。さらに世界へ武者修行に飛び出す若者への激励のメッセージともいえる海老原（2013）や、地球化学と社会との関係の考察と今後の展望が述べられた杉崎（2013）へと続くことで、本号の1つの目的は無事に達することができたと思われる。これらの貴重な原稿をお送り下さった諸先輩方に深くお礼を申し上げたい。

一方で、もっと直接的な将来展望も、地球化学の枠を超えた現代地球科学のトップランナーの皆様にご覧いただき、語って頂いた。その範囲は、宇宙と生命（丸山，2013）、データ駆動科学（鳥海，2013）、火星探査（加藤，2013）、マントル掘削（荒井，2013）と、大変バラエティに富んでいる。こうした境界領域の分野に、地球化学者は今後とも果敢に挑戦していかなくてはならない。このことも、本号の重要なメッセージであり、ご執筆下さった先生方に深く感謝したい。

最後に、さらにはるか先と思われる30年後を展望するために、30年後の研究者になりすまして論文（虚報）を書いて頂く、という企画を提案した。一体30年後の地球化学はどうなっているのか、化学分析はどのようなレベルに来ているのか、地球化学研究の前提となる試料採取や観測網はどのように発展しているのか。これら予想もできない困難な作業に、3人の先生方に挑戦して頂いた（田中・加藤，2013；蒲生，2013；植松，2013）。いずれの文章も、無駄に多忙な現代の研究者にとって、夢のまた夢のようなことを語ることの大切さを知らしめて下さるような、そんな論文になっていると感じる。無理な要求に存分に応えて下さった先生方に、心から感謝の意を表したい。

この特集号を一読して頂いたとき、読者の皆さんは何を思うだろうか。30年後には、地球環境や資源という、地球化学とも密接に関連したこれらの問題がより深刻化しているだろうが、一方で人間が持つ夢もまた消えることはないだろう。その狭間の中で、我々が愛する地球化学が大きく発展していることを願ってやまない。

（\*引用はいずれも本号掲載の論文である。）

「地球化学」編集委員会（委員長 高橋嘉夫）